

富樫 総一

富樫君が亡くなったのは、しとしとと氷雨の降る一月十八日（昭和四十八年）の早朝であった。肌を刺すような厳冬の静かな緊張は、君がその生涯を貫いた、はがねのような強靱な意志と人生に対する真摯な態度を象徴するかのようであった。

君は、それに先立つ数年間、けわしい闘病生活を送っていたが、片時も仕事と離れることなく、また学習を怠ることもなかった。日赤病院に入院してからも依然として、かかる緊張した生活が続いていたようだ。しかし残念ながら、君の病状は日とともに進み、さすがの君も遂に闘病の限界を迎え、これまで息せき切って力走を続けてきた人生に、到々終止符を打ち、静かな休息に入ることになった。

君と私は奇しくも一橋の同級生として、橋畔に知遇を得てから君の死に至るまで、終始、固い友情の絆で結ばれてきた。君は文字どおりの秀才であり、しかも独特のひらめきをもった鬼才で

あった。私は君との談論を通して大いに啓発された。君はまた氣宇闊大、未完ながら大器としての骨格をもち、学生時代から一きわ群衆を凌ぐものがあつた。

昭和十一年春、君は卒業と同時に地方長官を夢見て内務省に入った。しかし戦後、内務省は占領軍の手により解体の憂目を見、君は厚生省に、さらに労働省へ移つた。君は至る処において、その本領を發揮し、高い評価と深い敬愛をうけた。とりわけ労働省においては画期的な立法である労働組合法、労働関係調整法の立案に主導的な役割りを果たした。また、労働史上最大のものといわれた三池争議の解決に骨身を削る努力を致すなど、常に行政官として悔いのない充実した境涯を楽しんだ。

そして昭和三十七年には待望の労働事務次官に昇進し、異色ある数々の事蹟を残したのである。退官後は中小企業退職金共済事業団理事長に任命されたが、君の熱意と努力により同事業団は加入従業員三百万人、資産約千百億円にまで成長してきた。

君の五十八年にわたる生涯は、そのようにまことに多彩であり豊富であり、どの部分をとり出してもしも鮮血がふき出るような充実したものであつた。

君はまた公務の傍ら、人生の哲理に深く沈潜し、宇宙の秘密におののき、人生の哀歎に涙する人間味豊かな男であつた。病床にありながらも、読書三昧に耽り、家族を思い、友人を偲び、世

を憂えていた。私は君との交友に生き甲斐を感じ、君を友にもつことに大きい誇りを覚えていたのである。

還暦に満たない君の生涯は、むしろ短かきに失したといえよう。しかし君の一生は弓弦のような緊張と充実に支えられ、克く万古に生きるものとなったものといえよう。君の人生はさらに加算すべき何もものもなく、除算すべき何もものもない傑作の人生であり、その終焉もまた雄々しく、かつ完璧のものであった。だから君は有限の生涯において果たすべき一切の義務を見事に完遂されたのだ。私はそう思つて自らに言いきかせている。